演題 46	個人の支援から多職種による協働への移行 ～衰弱状態から回復した認知症の事例から学んだこと～
	発　表　者　**渡部 玲子**（山形県　おぐに訪問看護ステーション） 共同研究者　色摩 和子、木村 亜沙美、米野 早苗、舟山 香、吉田 久美、伊藤 和子、伊藤 優子、伊藤 宏、阿部 吉弘

小国町の概要

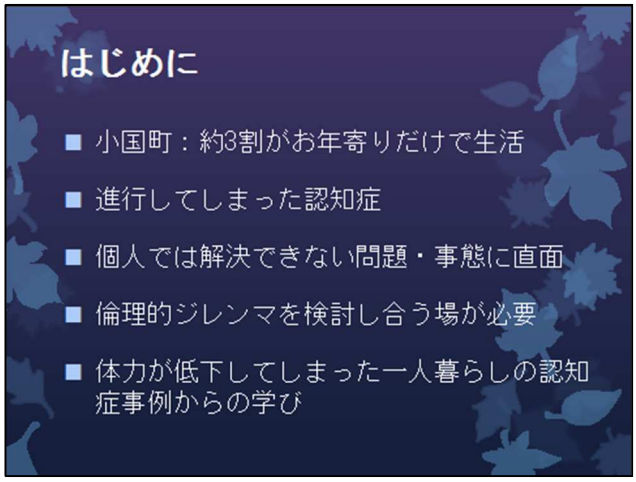
・人口 8,034 人・高齢化率 36.7%・高齢者世帯 845 世帯（27.5%）・面積 737Km^2

おぐに訪問看護ステーション概要

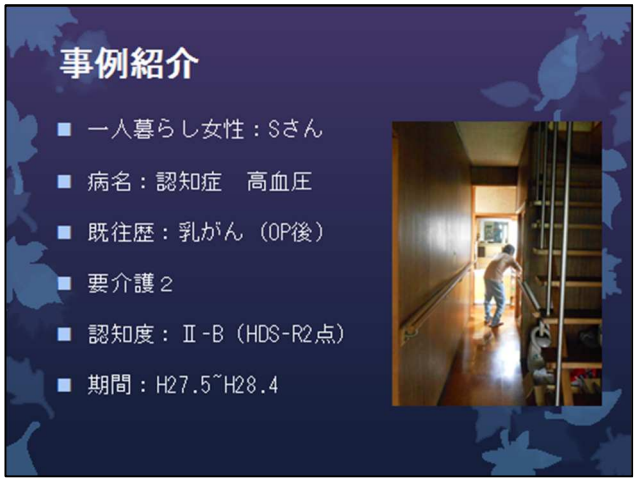
・看護師 6 名(3 名がケアマネ兼務)

・患者数 141 名・専任ケアマネ 3 名、事務員 1 名

・健康管理センター・病院・老健に併設されている



現在小国町では、約 3 割の世帯がお年寄りだけで生活しており、現場では認知症が進行してしまった事例に遭遇することがある。個人の努力だけでは解決できない問題・事態に直面している。倫理的ジレンマを顕在化し検討し合う場を設けることが必要である。この度、一人暮らしを続ける中で体力が低下してしまった認知症の高齢女性について、関係者で共通認識をもち、希望に寄り沿い回復した事例を経験したので報告する。



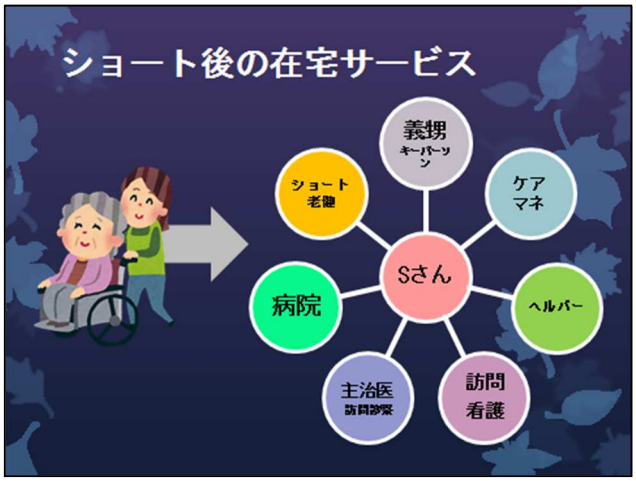
事例紹介

・一人暮らし女性：S さん

・町外から嫁ぎ子供は居ない
・病名：認知症、高血圧・既往歴：乳がん（OP 後）
・要介護２・認知度：Ⅱ-B(HDS-R2 点)
・研究期間：H27.5～H28.4

Ｓさん夫婦は、某サービスで知り合ったＡさんを頼り運転などを頼み暮らしていたが、ともに認知症が進行し、Ａ さんは対応困難となり介護保険サービスが入ることになった。

H27 年 5 月、夫は易怒性や町外まで徘徊し保護されるようになり精神科に入院、Ｓさんは不安で不穏状態となり緊急ショートを利用。



Ｓさんは帰宅欲求強く、夜間添い寝をしてもらったり、眠剤処方で眠れるようになり、トイレの場所がわかること、危険な徘徊がないことから 13 日間のショートステイののち在宅可能と判断され退所となった。在宅でＳさんを支えたのはケアマネ・ヘルパー・訪問看護・主治医の訪問診察・受け皿の病院・老健のショート・キーパーソンの甥、毎日サービスが入るようになった。

Ｓさんは進行した認知症であり、入院した夫のこともほとんど忘れてしまい、ケアの拒否はあったが何とか落ち着いて暮らしていた。しかし冬季に入り食欲が低下、寝ていることが多くなり右大転子部にⅡ度の褥創が発生してしまった。

体力の回復を願って受診介助したが、拒否が強く血圧も測れず、主治医と相談し少量でも経口摂取を促し自宅で過ごす方針となった。義甥にも主治医より説明があり、同意していただき自宅へ帰った。

本人の気持ちが変われば、病院の受け入れはいつでも可能だった。

しかし、毎日訪問していたヘルパーより、さみしそうな様子があることや、夜間何かあったらと心配する声があり、ケアマネ・ヘルパー・訪問看護で話し合いの機会を持った。

今は、本人が施設ではなく自宅での生活を望んでいること、義甥も様子を見てくれることや緊急時は訪問看護が速やかに対応することで、自宅での生活を支えていくことになった。

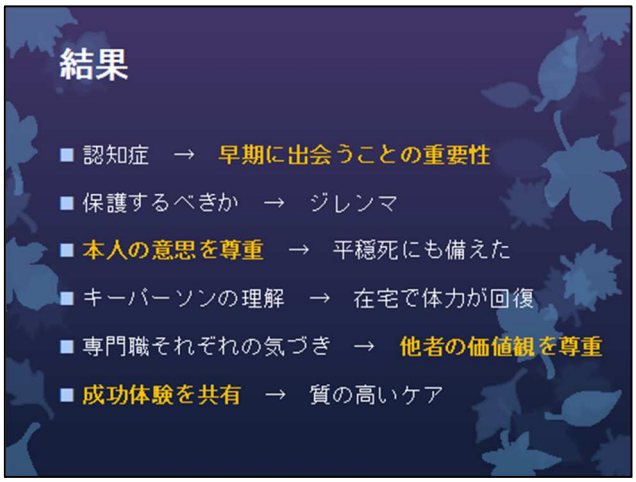
ケアマネは、意欲の低下や昼と夜がわからない状態で、どこまで本人の意思を尊重していくのか悩んでいた。しかし、まだ意思表示ができる状態であるという思いを持っていた。

ケアマネは、町のケアマネ会議でＳさんを検討事例として提出し、そこで「認知症でも本人の望む自宅で暮らしている幸せな利用者さんですね」という意見があり、支援の方向が間違っていなかったことを確信することができた。

看護師としては、意思決定能力は十分と言えるのか、どのような状態になったら保護するか、ヘルパーの不安と死生観の温度差を感じていた。

幸いＳさんの状態は改善、要因としては介護用の

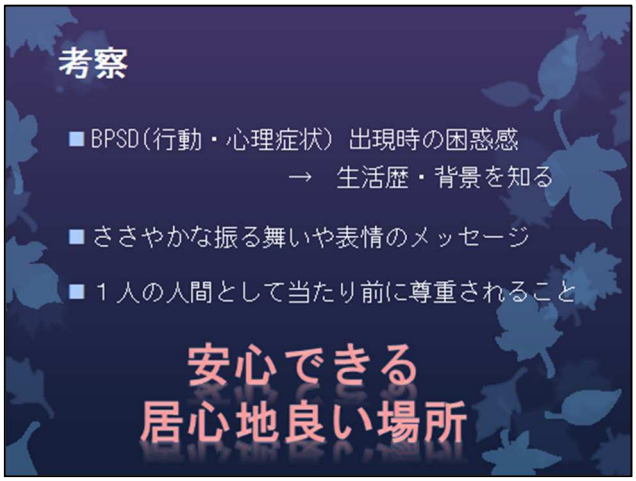
栄養補助飲料を好んだこと、布団の向きを替えこたつに入るため左を向くようになったこと、特別指示書で毎日処置に入ったこと、住み慣れた在宅でストレスが少なかったことも要因の一つだったと思われる。



Ｓさんは介護拒否があり、サービスを理解することが難しい状態で「早期に出会うことの重要性」を実感した。保護するべきかジレンマを抱えながら本人の意思を尊重し、自宅での平穏死にも備えた。

義甥の理解もあり、幸い在宅で体力は回復した。

専門職はそれぞれの気づきを持っている。他者の価値観を尊重し検討会を行い、成功体験を共有することが質の高いケアへとつながることを学んだ。



今までは、BPSD が出現したときの困惑感だけがクローズアップされてきた。問題行動のある困った患者さんというレッテルを貼られてきた時代があった。

しかし生活暦・生活背景はひとりひとり異なるものであり、その人の世界観を知ることからケアが始まると言われるようになった。ささやかな振る舞いや表情のメッセージも意思表示である。１人の人間として当たり前に尊重されること、そして患者にとって安心できる居心地よい場所が必要である。